

腹腔鏡内視鏡

合同手術研究会

Laparoscopic Endoscopic Cooperative Surgery
第20回 2019年11月20日

■ 特別講演

令和に羽ばたく L E C S のこれから

The future of LECS: flying high in the Reiwa era

演者：比企直樹（北里大学上部消化管外科主任教授）

Speaker: Naoki Hiki, Department of Upper Gastrointestinal Surgery Kitasato University School of Medicine

LECS は 2006 年 Hiki らが “classical LECS” を報告し、SMT に対する低侵襲手術として確立された手技である。Classical LECS は胃壁開放性かつ、胃内容が腹腔内へ流出するという大きな欠点があったが、Nunobe らによって腹腔への胃内容流出を最小限に留める Inverted LECS、胃の解放を行わない NEWS (Mitsui ら)、Closed LECS (Kikuchi ら) そして、Clean-NET (Inoue ら) などの手技が開発され、これら LECS 関連手技の適応は胃癌などの悪性腫瘍に対しても広がった。一方、現在、胃癌では ESD 適応かつ困難症例に限定されており、あくまで胃癌に対する LECS は特別な症例に対する治療となっている。近年、手術手技による長期予後に対するデメリットが述べられるようになった。Nunobe らによると、ステージ I 胃癌に対して手術を行った高齢者では通常より他病死が増加しており、高齢者に対する胃切除の侵襲が予後を左右する可能性があることが発表された。今後は胃癌に対して LECS を更に適応することで、より侵襲の少ない術式選択のオプションとなる可能性があり、当院では術式検討のための研究を進めてゆく予定である。高リスク、老人性痴呆、高齢などが重なった併存症の多い症例では手術を諦めることも少なくない。このような手術適応外症例において、進行胃癌に対する LECS も局所コントロールという意味ではひとつのオプションになるだろう。

さらに、LECS は十二指腸腫瘍、結腸腫瘍などへの応用が試みられており、十二指腸においては現在、保険適応が検討されている。

令和の時代、低手術侵襲が外科手術に求められるようになり、益々 LECS の持つ、最小限の侵襲と QOL の維持というキーワードが生かされるようになると思われる。